



木下恵介記念館 No.17 2016.3.1 発行

栄町だより

Keisuke Kinoshita Memorial Museum

公益財団法人 浜松市文化振興財団
発行：木下恵介記念館
〒432-8025 浜松市中区栄町3番地の1
TEL&FAX 053-457-3450
E-mail : kinoshitakan@hcf.or.jp
http://www.hcf.or.jp

原節子追悼

『お嬢さん乾杯』 特別上映に寄せて

横堀幸司

昨年7月から木下恵介記念館での終戦 70 年記念特別企画『戦争と恵介のまなざし』をテーマとした上映会は、誠に時宜を得たものだと私は思いました。ご存知のように木下恵介監督は、日本映画界でも稀有な、ホンモノの「反戦映画作家」でした。その「反戦平和への思い」は誰よりも深く鋭く、時代がどう移り変わろうと私達の心と肌に直に伝わって来ます。また、この企画での作品解説(講師)に私をお招き下さった事も身に余る光栄です。

さて、原節子追悼特別企画として2月に上映された『お嬢さん乾杯』は「泣く子も笑う」木下天才喜劇の絶品!です。木下恵介と言えば普通「泣かせる映画」の第一人者とされていますが、どうしてどうして洗練洒脱な外国の喜劇映画を全て凌駕して、日本人を一番笑わせた喜劇の天才でもありました。監督デビュー第一作『花咲く港』だって、ある事業家の遺児になりすました二人のペテン師が港町に捲き起こす大騒動。折りしも勃発した大東亜戦争の戦果に、町民の愛国心が詐欺師を洗脳してしまう軽妙洒脱な喜劇です。皆さんがご覧になった『陸軍』や戦後第一作となった『大曾根家の朝』等を経て、昭和24年に木下恵介が戦後の日本国民に送り届けた清涼な笑いの風、それが『お嬢さん乾杯!』です。現にこの喜劇創りの源泉は以後『破れ太鼓』『カルメン故郷に帰る』『カルメン純情す』へと繋がって行きます。

没落華族の令嬢(原節子)と新興自動車工場の経営者(佐野周二)が、「提灯と釣鐘」と言いながら無理矢理お見合いさせられ、以後織り成す思慕すれ違いの可笑しさに、私達は笑いが止まりません。それでいてちょっぴり胸の奥に込み上げて来る愛しさ、いじらしさ、涙。本当に、木下恵介は喜劇でも天才だったのです。画面が進むにつれて仕組まれていく笑いの陥穽に、私達は否応無くはまっています。どの部分がどう仕組まれているのか。

私の住む町で月一度、2年半にわたって催された「木下名画作品を語る会」に欠かさず来て下さった妙齢の女性記者鈴木晃子さんは「木下作品を次々と観るようになってまず驚いたのは、木下監督は「泣かせるだけじゃない」ということ。先入観があったのだが、実際は思いきり笑える作品あり、衝撃を受ける作品あり、色々と考えさせられる作品ありと、様々な姿をしていた。何十年前前



©松竹 1949

に作られた映画は、今となっては古いのではないかと思う人もいるだろうが、そんな事はない。何故なら人の心は変わらないからだ。

「恋心」を例にとってみよう。『お嬢さん乾杯』は街も古い、走っている車も古い、戦後の話なのだが、そこに描かれている恋する心は、何十年もの時を一気に飛び越えて私達に迫って来る。主人公は成金男・佐野周二。舞い上がったたり落ち込んだり、悶える姿は何とも可愛い。一方相手の“お嬢さん”の原節子は、元彼の存在に拘ったりして、自分自身の気持ちがいづの間にか変わっているのに気付かない。二人の気持ちは縮まったかと思うと、又すれ違っていく。進展するのかしないのか。確かに今時だったら携帯電話等小道具も多いから、見た目や行動は違うかも知れない。でも相手の気持ちが見えなくて悩んだり、一寸した事が嬉しかったりするのとは全く同じだ。勿論他の感情も共通するものがある。木下映画は図書館などでもよく上映されている。でもそれは、大抵お馴染みの作品ばかり。実は違った世界が広がっている。これをもっと多くの人に知って欲しいと思う。」と私共の会報で書かれています。

また『天才監督木下恵介(長部日出雄著・新潮社)』には「映画の最後、東京駅へ向かうシーンに「旅の夜風」のメロディがかぶさる。筆者が小学校へ入る以前から語っていた『愛染かつら』のクライマックスの見事なパロディに「終」の文字が出るので、新制中三年で初めてこの映画を観て以来今日迄見直す度に爆笑しつつ、滂沱として流れる感涙に咽ばずにはいられないのである。」と書かれています。

そして私はと言えば、あの銀幕の大女優原節子さんが映画の最後に口にする伝法な言葉「私、ホしております！」にいつも痺れて快哉を叫び続けて来ました。この作品をご覧になった皆さんと共に、昨年末人知れず逝かれた原節子さんのご冥福を心からお祈りしたいと思います。或いは木下先生も、あの黄泉の里で原節子さんとの再会を楽しんでおられるかも知れません。だって原節子さんの木下作品出演は、この名作たった1本だけのですから。(了)

上映作品の余韻

1949年公開作品 『破れ太鼓』
1947年公開作品 『不死鳥』

『破れ太鼓』 長女の結婚によって当てにしていた金が入らなくなり会社は倒産。この場面で木下忠司演ずる次男平二が重要な役割を担う。知っての通り木下忠司は木下恵介の実弟、戦後の木下監督作品の音楽を担当。生活意欲もなく、毎日ピアノの前に座って作曲を楽しんでいるという役柄。さすがの頑固親父も匙を投げていている様子。ほかの兄弟のように興奮することもなく、父親を冷静に見てよく理解している。普通ピアノを弾く指の動きは吹き替えのカットを使うが、ここでは主題歌を効果的に演奏させ歌わせるために演技は素人の木下忠司を思い切って使っている。木下忠司も出演することになったの抵抗もなかったと言う。五線譜を買いだめと母親に言う場面、そんな洒落たものに書かなくても便箋で間に合わせなさいという台詞は、実際に木下家で交わされた言葉のようだ。カレーライスを食べながら阪東妻三郎が自分の過去を回想するシーン。消沈しきった阪東妻三郎をじっと見つめて追うカメラの動き、回想シーンの演出もさすがである。



©松竹 1949

『不死鳥』 戦地に赴く息子は生きて帰れない。戦争未亡人になることは分かり切っている結婚は許す訳にいかないと言う父親を前にしての田中絹代の演技をカメラは追いつける。長回しで俳優の演技に賭けた木下恵介の演出。それに見事に応えた田中絹代の演技は観る者の心を打つ。激しい感情の高ぶりの中で長いセリフが続くが、無駄な言葉はなく、力強い言葉の響き。この作品は佐田啓二のデビュー作。入社直後の異例の大抜擢、田中絹代を相手に互角の存在感のある演技を見せている。やはりスターになる俳優は違う。ただ、役柄から見ると佐田啓二の若々しさに比べ、田中絹代が演技で如何にカバーしても娘(女学生)役のできるぎりぎりのところではないかとも感じた。



©松竹 1947

《館長 原田昌典》



4月～5月の上映案内

本年4月9日(土)に、浜松市出身の映画音楽家木下忠司(木下恵介監督の実弟)が、満100歳を迎えることから、4月9日より「木下忠司百寿記念特別企画(～11月30日迄)」を順次開催します。なお、4月～5月の上映作品は、次の通りです。
※詳しくは当記念館イベント案内をご覧ください。

木下忠司誕生日特別上映会
4/9(土) 喜びも悲しみも幾年月
上映 10:00～・14:00～



©1957 松竹

木下忠司作詞・作曲の主題歌は若山彰が歌い大ヒット。日本映画界始まって以来といわれた日本列島縦断ロケ。幾多の苦難を乗り越え寄り添い慎ましく生きる灯台守夫婦の半生を描く。

4月月例上映会
4/17(日) 風前の灯
上映 10:00～・14:00～



©1957 松竹

前作「喜びも悲しみも幾年月」の高峰秀子と佐田啓二に正反対の役柄を演じさせた皮肉と風刺のコメディ作品。タイトルにも「灯」を使い前作と対比し意識させる狙いが伺える。

5月月例上映会
5/15(日) わが恋せし乙女
上映 10:00～・14:00～



©1946 松竹

映画音楽家木下忠司のデビュー作。血の繋がりのない妹の幸せを願う兄の切ない恋模様を描くラブストーリー。原保美の乗馬シーンは木下忠司が代役を務める。